

## IMF本部での今昔 30年のIMF本部勤務

### 75年ジュネーブに単身赴任

ジュネーブ州住民局外国人課発行の(私の)外国人手帳(Livret pour étrangers)を見ると、入州年月日が1975年5月20日と記されています。私がジュネーブに本部をおく国際金属労連(IMF)に着任したその日です。

ジュネーブ行きの話は、ほぼ1年前頃、当時IMF J C事務局長(1)をされておられた瀬戸さんからいただきましたが、あまり深刻には考えてはいませんでした。話がとんとん拍子に進むなか、赴任3カ月前に駆け込み結婚、僅かばかりの家財道具を整理し、スーツケース1つでの慌しい単身赴任となりました。

ジュネーブ空港には、IMFのスタッフが迎えに来てくれ(それもなんとスポーツカーのジャガーで!)、書記局とアパートのありかを教えてくれました。これから手取り足取りいろいろ教えてくれる



IMF(国際金属労連) シニア・エグゼクティブ・オフィサー(SEO) 鎌田 普 かまた・ひろこ

72年IMF J Cに入局調査局で国際金属労組の賃金・労働条件比較を担当。75年IMF本部へ派遣。特別企画部長をはじめ、自動車、航空宇宙、電機電子、事務技術職など各種産業担当部長を歴任。95年IMF シニア・エグゼクティブ・オフィサー(SEO)に就任現任。03年SEOとして地域組織機構、地域事務所、財政、人事、総務を担当。

だろうな、との期待は、はかなくも消え去ることになります。(当然といえば当然ですが)私事は、全て自分でやらなければならなりません。英語もつたないうえに現地の言葉、フランス語はちんぷんかんぷん。もっとしっかり勉強しておけば

よかったと悔いても、どっしりよもない。日本語は、使おうにも相手がいません。仕事も、上司は(2)、大まかな指示を出すだけ。あとは、自分で責任を持ってやらなければなりません。皆が夕刻5時になれば家路に急ぐのを横目に、言葉の障



害ではかどらない仕事をこなすため遅くまで居残り、またフランス語の夜学に通いました。ジュネーブでの公私の生活は、異文化・社会の中で、プレッシャーを背負っての出発となりました。

## 一 人前になるまでに10年の歳月

当時のIMF本部は、45人を抱える所帯。今日と比べると20人ほど多く、私の配属先の社会・経済調査部も6人が働いていました<sup>(3)</sup>。今振り返ってみると、当時はある程度のゆとりがあったということなのでしょう。私を半遊軍扱いしてくれました。過度なプレッシャーも感ずること無く、充電期間に当てることが出来たのは幸いでした。

一方、半遊軍ということは、当然のことながら半人前ということをも意味していましたから、ある程度のおせりもありました。特別企画部長という肩書きをもらい、書記局のメンバーに加えられ、企画・立案から実行までの全責任を持つ仕事を与えられるまでには、スタートしてから10年の歳月を要しました。

1989年、レフハン書記長が退任し、スウェーデン金属出身のマルチェロ・マレンタッキがバトンを受け継ぐことになりましたが、彼の初仕事は、書記局体

制の引き締めを含めた合理化。本部体制も25人となり、業務が軌道に乗るまでに2年近くを要することになります。

## 書 記長交代を契機に試練のとき

書記長の交代を契機に、私の身辺も慌しくなりました。2〜3年周期で担当部署が変わることになります。毎日がオンザジョブの自己研鑽、教えてくれる人、助けてくれる人は無し。手探りしながら道を開いていくことになりました。今考えみると、この試練が私にとっての大きな財産になったと思われまふ。

IMFは、今更言うまでもありませんが、世界100カ国、200組織で構成されている組織です。したがって、1国、1地域の主張・利害をベースにした運動は進められません。ましてや書記局に働く一員として出身組合の利益を代弁することなどは、してはならないことであつて、あくまでも、IMF本部の一員として働くことを要求されます。このことは、主義、信条を変える、自らのよって立つところ(私の場合はIMF・JC)を軽視するということでは決してありません。このような葛藤が仕事を進める上で一番難しいところだと思ひます。

またIMFは、その規約にもある通

り、結社の自由、団体交渉の自由、差別の撤廃、児童労働・強制労働の禁止、などを求めて闘う国際組織でもあります。したがって、外部にオープンな組織でもあらねばなりません。このことは、ややもすると加盟組合の利害とかみ合わないことも有りうることを意味します。この辺のところの調整も非常に難しいところ

## い つかの間にかIMFで一番の古株

75年から数えて約30年のIMF本部勤務となります。書記局のメンバーでは、一番の古株になってしまいましたが、JC関係の数多くの皆さんのサポート無しには今日までの勤務は不可能であつたでしょう。深く感謝申し上げます。私の仕事部屋の本棚上には、ボール紙に張つたIMF・JC結成時のポスターが立て掛けてあります。JCは、IMF110年の歴史のうち、40年を共に歩んだことになりました。そろそろ名実共にIMF運動の主導的立場に立つてほしいと願うところしきりです。

(2004年8月17日カルージュにて)

1 IMF東アジア事務所長を兼務  
2 入局時は、社会・経済調査部に配属されカール・カサリー二書記次長が直接の上司、書記長は、ハーマン・レフハ。

今昔の  
もがたり